しあわせ

5　月　号

たとひ大千世界に（※だいせんせかい）
みてらん火をもすぎゆきて
仏の御名（みな）をきくひとは
ながく不退（ふたい）にかなふなり

（『浄土和讃』三一）

たとえ全世界が火でみちていようとも、阿弥陀さまの大悲の名のりを聞く人は、かならず仏となる身として、いのちの意味はさだまるのです。（意訳）

※大千世界…　三千大千世界。仏教の宇宙観。
※不退…　不退転。迷いに退転しない菩薩の位。

「手を合わす母」

五月二十一日は降誕会。親鸞様のお誕生をお祝いする法要です。令和五年には、親鸞聖人御誕生八百五十年をお迎えします。

最近、八百年前の親鸞聖人が身近に感じられるようになりました。若い頃、八百年前と聞くと随分昔と思っていましたが、自分が後、二十数年生きれば百歳になると思うと百年という時間もあっという間と感じられます。

すると八百年前もそんなに昔とは思えなくなって、親鸞様も身近に感じられるようになりました。

親鸞様の御真影さまが、語りかけて下さったり目の前にお立ちになって下さるのではないかと、ふと感じることも。

宇宙の歴史や人類の歴史、想像もできない数百万年前などという時間を聞くと、二千五百年前のお釈迦さまも、ついこの間とさえ思えます。時間に限らず何事も年齢や体験の違いで全く違った意味を持ってきます。「みんな違ってみんないい」　金子みすず。

法座案内

降誕会法要
新型コロナの影響により、中止致します。

親鸞さま有難うコンサート
新型コロナの影響により、中止致します。

法味の会　ーご和讃の味わいー
新型コロナの影響により、中止致します。

（新型コロナの影響により行事などに変更があった場合は掲示板に告知致します。）

府中町山田二丁目二十五十三
栢原山　龍仙寺
電話（〇八二）二八二四八二

【ご和讃をよむ㉔】～みてらん火をも～

今から百年前、スペイン風邪という猛威をふるった感染症がありました。世界で何千万という方が亡くなり、日本だけでも四十万人もの方が亡くなりました。その頃のお話です。

わたしの恩師の恩師で、山本仏骨という和上がおられました。お寺ではなく金沢のふつうのご家庭に生まれ、お坊さんになられた方でした。本願寺派のなかでは勧学という学僧の最高位まで昇られ、京都の龍谷大学でも教授として多くの学生を育てられた学徳兼備の和上でした。ただしこの仏骨和上、じつは小学校しか出ておられなかったそうです。仏骨和上が小学五年生のとき、スペイン風邪の大流行があり、仏骨和上のご家族は、お父さんからご兄弟まで五人、亡くなられたそうです。最後、お母さんと仏骨和上が残されました。お母さんはお寺の仏教婦人会に入っておられ、ご法義な念仏者だったそうですが、ついにお母さんまで、病にかかられました。噂を聞いた仏婦の方々が「これはたいへんなことになった…」とお見舞いに行ったところ、お母さんは床に横になっておられ、その隣にはぴったりと寄りそって、小さな男の子が寝ていたそうです。仏骨和上でした。その姿を見ると、言わずにおれなかったそうです。

「あんた、こんな小さい子を残して死んだらいけません。あんた死んだらいけません…」

しかしお母さんは、肺炎で苦しい状態にありながらも、明るく微笑んで答えられました。

「わたしは死んでいくのではありません。お浄土に生れさせていただくのです。お浄土に生れて仏さまになって、今からこそ、この子の生涯をつらぬいて守らせていただきます」

お見舞いに行った方が、その言葉に貫かれて帰られました。ほどなくお母さんはご往生され、仏骨和上は親戚の家に預けられました。それで小学校しか出られなかったのですね。

子供の頃から聡明な方であっただけに、悔し涙を何度も流されたそうです。自分が親戚の家で子守りをしているその目の前を、おなじ年頃の子供たちが楽しそうに学校に通っていきます。なぜ僕は学校にいけないのだろう。なぜ僕にはお父さんが、お母さんがいないのだろう…と。しかしその折ごとに思い起されるのは、あのときのお母さんの言葉でした。

ーわたしは死んでいくのではありませんーもう打つ手のない状況にありながら、お母さんはなお、行きづまることのない命を生きておられました。あのときお母さんをあのように言い切らせているものは何だったのか…。それが確かめたくてお坊さんになったのでしょうね、と和上は後々語られていたそうです。

お母さんが特別に心の強い方だった、というお話ではありません。お母さんも自分のまなこでは、もうどこにも逃げ場は見えなかったでしょう。家族みんな亡くなって、自分まで力尽きていかねばならない。いったいこの子をどうしてやれば…と。しかし、たとえこの眼には亡くなっていく命としか見えなくとも、仏さまはそうは仰っていない。仏さまは大悲の御名をもって、喚びつづけてくださっている。「どうかお願いだから、わが国に生れるのだと思いとっておくれ。汝はわが子である、かけがえない仏の子である…」と。

たとひ大千世界（だいせんせかい）に
みてらん火をもすぎゆきて
仏（ぶつ）の御名（みな）をきくひとは
ながく不退（ふたい）にかなふなり

お母さんは仏さまの仰せのなかに、生と死を貫いて行きづまることのない〝いのち〟を受けとめておられました。ともにお念仏いただきましょう。何が起きても不思議でないこの身のために、何が起きても捨てはしないと、仏さまが名のりをあげてくださっています。